

## Y7-13

### メディカルメイク外来におけるカウンセリングの在り方

前橋赤十字病院 看護部高度救命救急センター病棟

池田 理香、野上美由紀

【はじめに】当院では、マーク（白斑、母斑、あざなどの総称）がある方に対し、形成外科的治療の一つとして、県内で初めて、2010年4月よりカウンセリングを導入したメディカルメイク外来を開設し、現在、月1回外来を行っている。開設前に無料でメイクのみ実施したところ、マークがあることで、引きこもりや自信喪失している方が来院したが、施術中に涙を流す場面もみられ対応に苦慮した。そこで、メイク以外に個々の思いを表出させ、少しでも前向きになれるように援助する必要があると感じ、カウンセリングを導入した。メイク前にカウンセリングをすることで、クライアントから「重症な人じゃないと受けられないのか？」などの声も聞かれた。このことより、メイク施術前のカウンセリングについてアンケートを行い、カウンセリングの在り方や今後の課題を明確にしたので報告する。

【対象と方法】2010年4月～2011年5月に外来受診した12名を対象にアンケートを行い、カウンセリング内容、環境など調査した。

【結果】2歳～70代のクライアントより「カウンセリングがあってよかった」、「気持ち楽になった」など肯定的な回答が得られた。環境面では「カウンセリングという感じではなかった」と回答があった。

【まとめ】現在、精神的に重篤なクライアントは来院されていない為、カウンセリングは必要でないと感じていたが、30分程度のカウンセリングでも、話すことで気持ちが晴れ、表情が明るくなり、メイクも楽しんで受けられるということがわかった。しかし、白衣でカウンセリングをするため乳幼児に対し恐怖感を与え、有効なカウンセリングができていない。また、部屋もきちんと確保されていない為、環境も変えていく必要があると示唆された。

## Y7-14

### 福岡赤十字病院の緩和ケアチームの現状と展望

福岡赤十字病院 薬剤部<sup>1)</sup>

看護部<sup>2)</sup>、麻酔科<sup>3)</sup>、呼吸器内科<sup>4)</sup>、

外科<sup>5)</sup>、婦人科<sup>6)</sup>

藤永理恵子<sup>1)</sup>、佐々木照美<sup>2)</sup>、糸山 美妃<sup>2)</sup>、

井手麻利子<sup>2)</sup>、白井洋一郎<sup>3)</sup>、出水みいる<sup>4)</sup>、

小島 雅之<sup>5)</sup>、西田 眞<sup>6)</sup>

福岡赤十字病院は病床数509床の急性期一般病院である。2007年7月に緩和ケアチーム（PCT）の活動を開始した。現在、医師5名、看護師5名、薬剤師1名、MSW2名で構成している。PCTの活動は、依頼患者の情報をもとに、週1回の病棟ラウンドとカンファレンスを行い、検討内容をフィードバックするコンサルテーション型で行っている。更に月1回のPCT定例会議、週2回のがん支援相談、年6回の院内緩和ケア研修会を実施している。

PCT活動を開始後、約300件の依頼がっており、オピオイド処方件数も約2倍に増えている。それに伴い介入患者数も増加している。PCTへの依頼内容は、疼痛コントロールなど身体的苦痛に関する依頼が多いが、現在は精神的苦痛に関する依頼も増えている。個々の症例の転帰は、約半数が死亡退院である。患者や家族の意向に沿った終末を迎えられるよう、当院訪問看護ステーションや在宅医、ペインクリニック、緩和ケア病棟を有する病院などと連携をとっているが、思うように転帰できていない現状もある。

発足から4年の当院PCTの活動は軌道に乗ってきたが、専従の医師や看護師がおらず、診療報酬上は算定できていないのが現状で、病院の実績にもつなげていない。緊急時の対応やニーズに、より迅速に対応するためにも専従の医師の着任が求められる。

PCTの展望に、来年5月に開院する新病院での終末期病棟におけるビジョンの設定とデイホスピスの設立、更に緩和ケアが必要な外来患者へのサポート体制の構築を行うことである。

多職種チーム医療の中で、各職種それぞれの役割を担っているが、今後は栄養サポートチーム、感染制御チーム、褥創チームなども連携を深める必要性も感じている。